

〔第30回学術集会 国際的・学際的なオンデマンド講義〕

文化を越境する家族看護—新生児NPの視点から—

DNP, APRN, NNP-BC, FAANP, FAAN

Pediatrx Medical Group of Tennessee, United States.

Affiliated Associate Professor, Northeastern University, Boston

Associate Lecturer, University of Lusaka Zambia

エクランド 源 稚子

新生児ナースプラクティショナー（NP）として新生児集中治療の最前線にいる者は、どれほど安定した患者の出産を予期して分娩に立ち会っても、またその逆に不安定で死亡率の高い状況に置かれる状況に関わっても、新生児のみをケアするのではなく、新生児と家族を一体として絶えず考慮する立場に置かれる。よって、家族看護学という専門性への認識や特別な意識を持たずして、NPの立場から家族看護を提供して来たのかもしれない。実際、新生児集中治療の専門の学びは家族を考慮する項目なしでは修了できない。近年、演者はザンビアで新生児専門コースを大学院で設置するプロジェクトに関わっているが、呼吸器系の病態生理学や臨床での鑑別診断の講義などを提供する傍ら、家族看護に当てはまる講義を担当した経験からも、文化を超えて、家族の重要性をアフリカの学生の声からもそのことを学んでいる。

米国の臨床現場において、日本なら医師が呼ばれるであろう緊急帝王切開などにはNPが呼ばれる。演者の場合、医師が常駐しないNICUでの勤務の方が多い。呼吸困難となる新生児へ治療開始の判断を瞬時にしたり、想定していなかった先天異常が出生時に判明する状況に出会ったりする中で、‘おめでとうございます’の言葉を発すると同時に、心理学・社会学的要因に思いを巡らせ、最低限必要な状況を家族へ簡潔に、かつ適切に説明することで家族の精神面へのサポートを短時間で提供し、児の命を

優先して対応しなければならないことを伝える。このような場面をごく最近の現場でも数回体験した。そして家族への対応をNPが率先することは、新生児を担当する看護師のためにも重要となる。家族へ何が伝わり、家族がどのような反応をしたかを看護師へ即座に伝えることは、演者の臨床現場での重要な役割の一つである。NPのこの能力は現場の医師らへも、家族とのやりとりの重要性に関して大きな影響を与えていると考える。看護の背景をもつNPは、医師よりも治療に関して家族への確に説明することができ、看護師から家族への病状説明をNPからしてほしい、と依頼される場面も数多くあった。

NPである演者の家族看護実践として、臨床現場のみではなく、治験や将来の治療や新しいデバイスを考案する際の家族との連携も重要であることを述べたい。新生児対象の治験は複雑であるが、特に少子化の日本では新生児人口が著しく少なく、治験での成果を得ることは非常に困難で、欧米の状況と比較し日本では更に困難な状況が見られる。新生児専門の薬品開発に関する国際的な努力が2015年から始まっており、演者は米国の看護組織代表として関わっているが、従来の家族看護の定義にとどまらない家族との連携が世界的に増えている。家族は共同研究者であり、ここ数年家族が共著者となっている医学・看護ジャーナルへの投稿も増加した。演者が関わったいくつかの研究も紹介した。